

「シオニズムの考古学：現代ユダヤ社会におけるディアスポラとイスラエルの相克」  
第三回公開ワークショップ

日時：2008年12月21日（日）：14：30～18：00

場所：大阪大学人間科学研究科（吹田キャンパス） 東館1階 105講義室

① 研究報告：14：30～15：30

「ガリツィアは誰のものか」 野村真理（金沢大学教授）

【報告者略歴】

1953年生まれ。一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程退学。一橋大学にて博士（社会学）取得。金沢大学人間社会研究域経済学経営学系教授。専攻は社会思想史、西洋史。著書に『西欧とユダヤのはざま—近代ドイツ・ユダヤ人問題』（南窓社、1992）、『ウィーンユダヤ人—19世紀末からホロコースト前夜まで』（御茶の水書房、1999）、『ガリツィアのユダヤ人』（人文書院、2008）、共著書に『民族』（ミネルヴァ書房、2003）、『東欧の20世紀』（人文書院、2006）、『思想史と社会史の弁証法』（御茶の水書房、2007）など。

② 特別講演（英語：通訳なし）：16：00～18：00

「トーラーの名において——ユダヤ教超正統派による反シオニズム闘争の100年」

**"In the Name of Torah: A Century of Jewish Opposition to Zionism"**

ヤコブ・ラブキン（モントリオール大学教授）

【講演者略歴】

1945年、旧ソ連、レニングラード（現サンクト＝ペテルブルグ）生まれ。レニングラード国家大学で化学ならびに東洋学を専攻。ソ連科学アカデミー（モスクワ）で科学史の博士号（Kandidat Nauk）を取得。1973年以来、カナダ、モンレアル（モントリオール）大学歴史学科に専属し、アメリカ、フランス、イスラエルの各大学で客員教授を歴任。科学史、ロシア史、ユダヤ史を講ずる。既刊書に『超大国間の科学』（1988）、『近代における科学文化とユダヤ文化の相互作用』（1995、アイラ・ロビンソンとの共編）、『ポスト共産主義世界における新技術の普及』（1997）があり（いずれも未邦訳）、その他、研究論文の主題は広範多岐にわたる。近著『トーラーの名において——ユダヤ教内部からのシオニズムに対する抵抗の歴史』（フランス語、2004）は、英語（原題"A Threat From Within: A Century of Jewish Opposition to Zionism" 2006年、カナダ総督賞受賞）、アラビア語、スペイン語、イタリア語、オランダ語、ポーランド語訳に訳され（ヘブライ語、ロシア語、中国語、トルコ語、インドネシア語への翻訳も進行中）、世界各地で反響を呼んでいる。使用言語はロシア語、ヘブライ語、フランス語、英語、スペイン語。